

コラ詩編（詩42／43－49編）の構成と主題

飯

謙

Summary

On the Redaction and Theme of the Qorah Psalms (Pss.42/43–49)

KEN II

In 1994, two theses, dealt with Qorah Psalms, were published. One was by Ernst Zenger, the other was by Jürgen van Oorschot. In this paper, I have criticized their standpoints, and considered a suitable way for understanding this psalms group (Pss.42/43–49).

Zenger presented his hypothesis of the redactional process of Pss.42/43–49, 84–85 and 87–88 in his thesis, “Zur redaktionsgeschichtlichen Bedeutung der Korachpsalmen”, in: K. Seybold, E. Zenger (ed.), *Neue Wege der Psalmenforschung*, 1994. He constructed his hypothesis according to his scheme on the redactional process of the Psalter. He considered the Qorah Psalms to reinforce the “Poor-Theology” (Armen-Theologie). Zenger regarded the Pss.49 and 88 as the text, put into the Qorah Psalms in the final redactional stage.

Oorschot expressed his opinion in his thesis, “Der ferne *deus praesens* des Tempels. Die Korachpsalmen und der Wandel israelitischer Tempeltheologie”, in: I. Kottsiepen, u.a. (Hrsg.), “*Wer ist wie du, HERR, unter den Göttern?*” *Studien zur Theologie und Religionsgeschichte*, 1994. He regarded Pss.42/43–49 as a chiasmic unit and supposed that the redactor of this psalms group had intended to reform the Jerusalem Temple-Theology or Zion-Theology.

Though Zenger and Oorschot pointed out words and motifs that occurred repeatedly in the Qorah Psalms in detail, they did not observe the cohesion among the psalms. I have insisted that the cohesion of the psalms group should be investigated. As my working hypothesis, the psalms group of the Qorah Psalms in Pss.42/43–49 presents a new perspective on the heathens, that they are also in the hand of Jhwh, and rebukes the arrogance of the upper classes in Israel. I suggest that these themes are continued on to the second Davidpsalter (Pss.51–72).

詩編42／43－49編には、よく知られているように「コラの子らに」(*lbnj-qrh*)という表題が共通する作品群が保存されている¹⁾。歴代誌によれば、コラとはレビに属する一族であり、神殿の門衛(上9：19、26：1以下)、祭儀で用いる菓子やパンの製造(上9：31－32)、そして祭儀における歌唱(上6：21、下20：19)を担当していた。この小詩集には、いかなる想いが込められているのであろうか。

むろん今日われわれは、旧約詩編で彼らの名を表題に残す作品が、すべて彼らのみによって完成させられたとは考えない。しかし旧約詩編の編集者らは、古代ユダヤ教社会において必ずしも確固たる地位を得ていたとは言えない彼らの心への共感をもって、彼らの諸作品を採用したはずである。コラ詩編のメッセージを探求することは、そのまま旧約詩編編集の鍵を提示するであろう。そこで本稿では、この小詩集の構成に関する E. Zenger と J. van Oorschot の見解を瞥見し、われわれが旧約詩編の使信を考察する手がかりを得たい²⁾。

1. E. Zenger

Zenger は、1991年の「正典的聖書解釈」³⁾と題する論文で、詩編42／43－49編の構成に関するデッサンを示し、詩編46編を中心とする集中構造を指摘した。それは共同体の歌である44－48編を個人の詩編である42／43編と49編とが外枠として囲むものである。彼は、しかしながら、1994年の「コラ詩編の編集史的な意味について」⁴⁾と題する論文で、自身の見解を修正し、この詩集の編集意図を叙述している。彼によれば、詩編42／43－49編は、45編を中継作品として二つの小統一体、詩編42／43－44編と46－48編とを結び合わせ、終結部に詩編49編を補うことによって創作された小統一体である。彼はその順序に、かなり意図的、技巧的な構成の痕跡を観察したのである。

1.1. 詩編42／43－44編 詩編42／43編は、一読して分かるように、隠れたシオンの神との出会いを願う歌である。この作品は、神の不在もしくは神が詩人に対して行った仕打ちを嘆いているのであるが、Zenger は、個人の歌におけるそのモチーフが集団の詩編である詩編44編においていっそう強められていると述べる。そこには、その民を拒絶した神に対する告発が含まれていると言うのである。Zenger は表題を参照し、これら二つの詩編が親密な関係にあると指摘する。それはマソラ・テキストにおける両者の表題が、次に示すように、順序は異なるが、同じ要素によって構成されているからである。そして後述するが、45編以下でも、そのような表題上の関連性は継承されている。

詩42／43編 *lmnšh mškl lbnj-qrh* (指揮者に。マスキール。コラの子らに。)

詩44編 *lmnšh lbnj-qrh mškl* (指揮者に。コラの子らに。マスキール。)

続いて Zenger は鍵語について考察する。まず彼は詩編44編の原作品を2-9節のみとし、10-27節を後代の挿入と見た。彼は、この作品の挿入部である終結段落が、嘆きもしくは告発の歌である詩編42/43編の内容を総括していると言う。彼は、詩編42/43編の三連に見いだされる嘆きのテーマを、a. 詩人が神の顔をもはや見られない(御顔を隠された[*str*]=42:3)、b. 神が詩人を忘れた(*škḥ*=42:10)、c. 神が詩人を捨てた(*znḥ*=43:2)、と要約し、これらの鍵語が詩編44編24-25節に集中していること、またそのテキストに42/43編で繰り返される「なぜ」(*lmḥ*=42:10, 43:2)が二度見られること、詩編42/43編にしか用いられていない敵対者の行為に関する語「弾圧」(*lhṣ*)があること(25節)を指摘する。さらに Zenger は、死の表象である26節「魂が、身をかがめる(*šḥḥ*)」と、詩編42/43編のリフレインにおける「魂」の置かれた状況との類似に注意を促し、詩編42/43-44編が元来は一つの統一体(*die Einheit*)であったと語る。

24. 覚えてください。なぜ(*lmḥ*)、あなたは眠っておられるのですか、主よ。

目覚えてください。あなたが捨てること(*znḥ*)がありませんように、とこしえに。

25. なぜ(*lmḥ*)、あなたの顔を、あなたはお隠しになる(*str*)のですか、

あなたはお忘れになる(*škḥ*)のですか、私たちの苦しみと私たちへの弾圧を(*lhṣ*)。

26. なぜならば、身をかがめているからです(*šḥḥ*)、塵に、私たちの魂は、

張り付いているからです、地に、私たちの腑(はらわた)は。

27. 立ち上がってください、私たちのためのたすけよ、

私たちがあがなって(*pdh*)ください、あなたの慈しみのゆえに。

1.2. 詩編45編の位置づけ 上記した小統一体は、終結部(44:24-27)にいくつかの命令形を連ね、神が詩人たちの現実介入するよう嘆願する。Zenger の読むところ、この神に対する問いかけに応答するのが、後続の詩編45-48編である。彼は表題文を観察し、詩編46-48編が一つの統一体であり、詩編45編は前後の統一体を現在の配列に整理する役割を果たしたとする。

詩45編 *lmnṣḥ* 'l-ššnjm *lbnj-qrh* *mškjl* šjr jđjdt (……「百合」による……愛のうた)

詩46編 *lmnṣḥ* *lbnj-qrh* 'l-ʾlmwt šjr (……アルムートによる。うた)

詩47編 *lmnṣḥ* *lbnj-qrh* *mzmwr* (……賛歌)

詩48編 šjr *mzmwr* *lbnj-qrh* (うた。賛歌。……)

詩49編 *lmnṣḥ* *lbnj-qrh* *mzmwr* (……賛歌)

上述したように、Zenger は、詩編45編が表題の上で、詩編42/43-44編と46編以下とをつないでいると言う。すなわち、詩編45編の表題を構成する六語のうち三語(*lmnṣḥ mškjl lbnj-qrh*)は、詩編42/43-44編と共有されており、かつ *mškjl* を除き詩編46編でも用いられて

いる。また他の語 (l……, šjr) も詩編46編に見られる。彼はこのような表題の関連づけによって、詩編45編と46編以下とが結びつけられたと見る。さらに詩編46編で用いられた šjr と詩編47編で用いられた mzmwr を冠する48編が統一体を締めくくると述べるのである。そうして詩編46-48編の中心に位置する47編と同じ表題をもつ詩編49編が、後に——Zenger の考えるところでは捕囚後の時代に、補遺として付加されたと言うのである。

では、詩編44編と45編とは、どのようにして結びつけられているのであろうか。Zenger は、詩編45編 2-10節に二行詩と三行詩が混在しているのに対して、11-16節が二行詩だけでつづられていることを確かめ、2-10節と17-18節を原作品、そして新婦に向けられた11-16節をこの詩編の拡張部と見る⁵⁾。その上で詩編44編と45編との語彙レベルでの対応に目を向け、詩編44編 5節「あなたこそが、私の王 (mlk) です、神よ」と24節の「主よ ('dnj)」が、拡張部である45編12節の新婦に対する言葉「王 (mlk) は求める、あなたの美を／なぜならば、彼こそが、あなたの主人 ('dnj) だからだ」にエコーしていると述べる。このようにして編集者は、嘆きと告発に彩られた詩編42/43-44編の小統一体を新しい音調へと移行させたと言うのである。

1.3. 詩編46-48編と44編、45編 Zenger は、上述したように、詩編45が44編と46-48編とを結び合わせていること、そして詩編45-48編が直前までの小統一体に盛り込まれた多様な嘆きに対する応答を記していると言う。とはいえ、詩編45編と46編との間には語彙やモチーフのレベルにおける明確な対応が見いだされない。そこで Zenger は、詩編48編と44編との関連づけを試みる。

まず彼は以下に示すような響きの違いに基づき、詩編48編のうち、10-12節が後代の挿入であると言う。①この作品は神を基本的に三人称で言い表すが、このテキストだけは二人称、②全体は「山の上の街」をよるこぶ内容であるのに、このテキストだけ神殿のイメージが登場する。③何度か登場する「シオンの山」は、2-4、13-15節では称賛の対象だが、12節では神を称賛する主体、④全体に見られる敵の王や恐怖の来襲のモチーフが、このテキストでは役割を果たしていない、⑤2-4、13-15節は「楼閣」('rmwn)、「やぐら」(mšgb)、「塔」(mgdl)、「城壁」(hjlh) など、いわば力の論理を提示するが、このテキストは神の「慈しみ」(hšd)、「義」(šdq)、「公平」(mšpt) といった契約の語彙を用いる。Zenger の見るところ、拡張部である詩編48編10節「あなたの慈しみ」(hšdk) は詩編44編のクライマックスである27節 b に、48編11節の「あなたの名」(šmk) は44編 6、9 節に、「あなたの右手」(jmjnk) は44編 4 節にそれぞれ反映している⁶⁾。

次に詩編45編と48編との関連であるが、詩編48編の拡張部である12節「(ユダの) 娘ら」(bnwt) とやはり45編の拡張部である11節の「娘よ」(bt) とのつながりを、一つの根拠として指摘することが許されよう。続いて思想上の連続性に目を向けたい。詩編46-48編は、「神の都」の住民とその周辺に居住する「ユダの娘たち」を救うシオンの神、ヤハウエ・ツェパオートによる王的な支配を語る宣言を含んでいる。その神は、全地、そして諸民族を解放する。す

なわち、この諸民族のモチーフは、詩編44編10-23節では神の民に災禍をもたらす人々であったが、詩編46-48編ではシオンの神を世界の王と告白する者へと移行しているのである。

その具体的な転換点は、詩編45編終結の18節「私は覚えるでしょう、あなたの名を、いつまでも／諸民族は、あなたを讃えます、永遠に、いつまでも」に見られる。この個所における一人称および二人称の指示対象が誰となるのか、議論を要する。二人称について考察すると、3-10節は「王」であり、11-13節は明らかに「娘」、すなわち新婦である。しかし彼女は14-16節では三人称で呼ばれ、17節は動詞が男性形となり、二人称の指示対象は再び「王」となる。であるならば、18節も「王」が二人称の指示対象となっているように感じられる。だが、18節は、冒頭の2節とインクルージオを構成するかたちで歌人（原作者）がしたための「結句」である。対応する2節で王が三人称で表現されているのであるならば、この18節も同様に考え、二人称の指示対象は「王」以外の者、すなわち「神」と見なすべきであろう。それゆえ、18節において、詩編46編以降を方向づける、諸民族に対する新たな見方が示唆されたと考えて良い。

1.4. 詩編49編 Zenger の共同研究者である F.-L.Hossfeld は、この詩編の原作品を11-15, 21節、補筆部を2-10, 16-20節と見る⁷⁾。原作品はリフレイン部（13, 21節）も含め、財宝や地所をもつ富者に向けて問いかけている。しかし補筆部は、それら富者を向こう側に置いて、貧しい者の側から発言していると言うのである。彼の見るところ、原作品は知恵の危機に直面しているが、ヘレニズム時代の影響は観察されないので、捕囚後の「コヘレトの言葉」成立以前の5-4世紀に編纂された。これを前提として、Zenger の議論が始まる。

Zenger は、旧約詩編に保存された二つのコラ詩編（詩42／43-49編、84-85+87-88編）の終結部に知恵の作品がきていることを指摘する。これには、詩編を知恵のサークルに定着させ、瞑想的な「生活の教え」（*Lebenslehre*）とする意図があるというのである。したがって彼は、詩編49編と88編とが（捕囚後と思われる）コラ詩編編集作業の最終段階に、二つの小詩集に組み入れられたと見る。確かに詩編49編は直前の小統一体との内容的な強い結びつきが感じられない。そこで Zenger は、詩編49編が「意味論的な観点から、先行するコラ詩編（および後続のアサフ詩編＝詩編50編）との結びつきは少ない」⁸⁾と認め、大きな文脈としてではなく、他のコラ詩編中の個別作品との単語レベルにおける関連性に目を向ける。

a. 詩編42／43編のリフレインでは苦しみ魂（*npš*）への励ましが歌われていた。この *npš* 理解は49編 9, 16, 19節に継承されている。さらに49編16節では、神がその魂を死の力から解放するという希望のメッセージが織り込まれている。

16. 本当に、神が、あがなわれます（*pdh*）、私の魂を（*npš*）、陰府の手から、
なぜならば、彼が私を取り上げられるからです。

ここで用いられる「あがなう」（*pdh*）は、詩編42／43-44編の終結部である詩編44編27節

でも強調されている。

b. 詩編49編冒頭段落にある全民族への呼びかけが、詩編45編18節で暗示され、46-48編で明示される他民族への視点を受容している。またこの段落最終行の「琴をもって」(bknwr=5節)という言い回しは、43編4節と共通する。

c. 表題が、詩編46-48編の中心である47編と同じである。

d. 詩編48編末尾の「死を越えて」(l-mwt) が詩編49編の表題である可能性があり、ここで両作品が強く結びついている。

Zenger はこのようにして、もともと個別の小統一体であった詩編42/43-44編や46-48編が、独立した作品である詩編49編と関係づけられたという。彼は、この結合によって、個人の詩編である49編がやはり個人の詩編である42/43編の問いに回答を与えているとも述べている。筆者は、それ自体を否定するものではないが、そうであるとしても、その構造において内枠となる詩編44-48編の果たす役割が不鮮明であると言わねばならない。むしろ詩編49編は、詩編48編までの作品群を詩編50編および第二ダビデ詩編(詩51-72編)へと橋渡しする機能を担っていたと見るべきであると考ええる。

2. J. van Oorschot

2.1. コラ詩編(詩42/43-49編)の構造 この項では、J. van Oorschot の見解を検討する⁹⁾。前項で取り上げた Zenger は当初、当該の小詩集がキアスムスを構成すると主張したが、後にそれを変更した。しかし Oorschot はその当初の見方に立って議論を進める。すなわち、このコラ集は共同体の歌(詩44-48編)を二つの個人の祈り(詩42/43, 49編)が囲んでいる。そして、外枠の二作品は言うに及ばず、内枠の五作品もそれぞれ対応の関係にある。

詩42/43編	個人の祈り
詩44-48編	共同体の祈り
詩49編	個人の祈り

2.2.1. 詩編42/43編と49編 彼によれば、両端作品の作者は共通の状況——遠く隔たった「生ける神」(42: 3, 7-9) もしくは不可解にも世界を決定づける不正(49: 6-7, 17-20) が実存を決定する——に置かれている。Oorschot は、この背後に立てられた根本的な問いが、詩編42/43-49編のコラ詩集を、イスラエルのシオン神学と神殿神学という大きなテーマとの議論に導くと述べる¹⁰⁾。

2.2.2. 詩編44編と48編 次に、キアスムスの内枠を構成する作品の対応関係を目を向けた。Oorschot は、共同体の嘆きの歌である詩編44編に、シオンの歌である48編が、以下にあげるような共通構造において、回答を与えていると言う。

a. 「われわれは聞いた」(šm'nw=44: 2a, 48: 9) 詩編44編における「聞いた」こととは、かつて父祖たちが味わった昔日の栄光である。それはいまやイスラエル民族が神に見捨

てられたことによって失われてしまった、いわば実体のないものとなった。しかし詩編48編では、「聞いたこと」を具体的に「見た」と確言する。Oorschot はこれを、両作品を関係づけるための編集的な語句と見る。

b. 「数え上げる」(spr=44: 2b, 48: 14) 詩編44編におけるこの語の目的語も、a. と同じく父祖たちの体験であり、神が彼らのために「いにしえの日に」行ったが、いまは忘れ去られた御業である。しかし詩編48編におけるそれは、15節に記されているように、神が永遠に、しかも「死を越えて」、イスラエル民族を導く現実 (nhg=未完了形) を、数え上げるべき対象としている。

c. 「王」としてのヤハウエの呼称 (mlk=44: 5, 48: 3) 詩編48編では尊称としてヤハウエを「王」と呼んでいるが、詩編44編では、戦いにおける主導性への期待として、この呼称が用いられている。これは「讚美」と「名」(hll, šm=44: 9, 48: 11) についてもあてはまる。

2.2.3. 詩編45-47編 詩編45編について、Oorschot は Zenger の見解を受け入れ、2-10, 17-18節を捕囚前に創作された原作品、11-16節を捕囚後にシオンの王としてのヤハウエを新たに解釈してつづられたとする。ただし彼はこの挿入部を、捕囚期から捕囚後にかけての救済預言の伝統に基づき、妻たるシオンが王なるヤハウエから呼びかけられたテキストと考える。Oorschot は、この王からシオンへの呼びかけが、詩編47編における民への呼びかけに反映していると見るのである。

そうしてこの構造の中央に、詩編46編が来る。Oorschot は、この作品のリフレインにある「ヤハウエ・ツェバオートは、我らとともに」が、イスラエルが現実面に直面する苦難の中で語られた信頼の言葉であるとする。

2.3. シオン神学および神殿神学との関わり しかしながら Oorschot の分析は、このような形態の問題に尽きるのではない。彼は、この小詩集が個人と共同体の詩編の結合によって構成されていることを指摘する。そして個人の詩編である両端の作品もまた、上記した詩編46編にある「神は、我らとともに」というような、「共同体の祈りのひな型」(ein Grundmuster gemeinschaftlichen Betens) を採用していると指摘する (S. 420)。この文脈における「ひな型」とは、リフレインを指す。Oorschot によれば、それは神殿礼拝において特に会衆の応答として用いられたスタイルであり、詩編42/43編および49編の作者は、それを、神への信頼という意識を更新するために、個人的な省察や魂との対話、あるいは自己鼓舞を含む言い方で、個人の詩編の中に組み込んだと言うのである。彼は、作品末尾においてこのような未解消の緊張を伴う祈りを置くことが、直接あるいは間接に、ヤハウエへの信頼にとどまって生きる姿勢を喚起すると述べる。

この作品の編集者が、伝統的なシオン神学あるいは神殿神学に立っていることは明らかである。だが、詩編42/43編の詩人は、神との間に生じた距離を悩んでいる。彼は、このようなリフレインを含む形態が、神の臨在の経験による苦難の克服ではなく、「神との隔たりを希望の

うちに生きることのできる能力」を示し、ディアスポラの実存を導く祈りとして理解されたと述べる。Oorschot はここに、われわれのコラ詩編が個人と共同体の祈りの連携によって構成された意義を見るのである。

そして Oorschot は、詩編44編に目を転じる。彼は、Zenger とは異なり、2-6, 8-15, 18-20, 23-27節を原作品、7, 16-17, 21-22節をこの小詩集の編集者による挿入と見た。彼によれば、この挿入部には申命記主義的な視線に対する不信が込められている。これらの挿入部には、神に対する人の側からの継続的な誠実が語られている。にもかかわらず、イスラエルもしくは信仰者個々人の罪が示唆される。彼の見るところ、捕囚前の神殿神学に立つコラ集に属する各作品は、元来、人の罪や神の怒りを教科書的に説明する思考の枠組みに対して、批判的な態度をとる。彼らは、贖いの祭儀に特徴づけられる祭司記者の神殿神学にも対抗する姿勢をとった。申命記主義者はエルサレム神殿を、ヤハウェが選んだ唯一の場としてヤハウェの神殿臨在を語り、祭司記者は救いに満ちた生の基礎を、全祭儀を根本的前提とするものとした。しかしわれわれのコラ詩集は、そのような道を選びとらなかった——それが詩編44編の編集に現れていると言うのである。

Oorschot は、詩編49編によってコラ詩集が、可能性や資力を喪失し、それゆえ「逃れ場」としてのヤハウェに疑義を抱かざるをえなくなった同時代の人々に対して、より広範な問いを提出したと述べる。この詩編は預言者の言葉と並行し、イスラエルに知恵文学の中では後期の形態に属する。つまり「コヘレトの言葉」とも関連するが、富裕層や支配層の中で確立していた知恵が批判にさらされた(11-13, 21節)。富裕な権力者たちを恐れなければならない信仰者の現実体験は、神殿に神が臨在するという伝統的な理解と大いに矛盾する(6-7節)。彼の考えるところでは、信仰者はそこで人が等しく赴かなければならないシェオールへと想いをはせ、神が信仰者をそこから救い出すとの希望を得た(16節)。

ここで Oorschot は、詩編48編の考察に移る。彼はまず詩編42/43編を取り上げ、その作品がもつ内省的な発言を単純に反祭儀的な個人の祈りと解するべきではないと語り、詩編48編9-11節の神殿で神のヘセドを熟考する(dmh)というテキストを提示する。これは Zenger によっても強調されていたテキストであるが、Oorschot は、ここにヤハウェ共同体としてのアイデンティティーが確立される神殿神学の新しい道が開かれていると述べる。彼は、捕囚前の詩編の神学とシオン伝承との積極的な接点の特徴づけられるとして、詩編48編を高く評価する。Oorschot は、コラ詩編の編集者たちが、捕囚後共同体の神殿神学と王や神殿を喪失する以前のそれとを区別する祭儀的な概念を映し出そうとしたと言うのである。

3. 批判と展望

以上、われわれは Zenger と Oorschot の見解を概観してきた。Zenger は語彙とモチーフの関連から編集の歴史を整理し、そこから彼が Hossfeld と共に旧約詩編最終編集の基軸と見てきた貧者の神学導入の過程を探究した。また Oorschot は、捕囚後に活動したコラ詩集の編集者が試みた伝統的なシオンの神学や神殿の神学を改訂する作業を跡づけようとした。しかし

彼らの分析には、コラ詩編の配列に関する有効な考察が見られない。

ここで旧約詩編の研究に、その配列順が考慮されるに至った経緯を改めて確認しておきたい¹¹⁾。N. Fuglister がこの視点を提唱した出発点は、死海写本11QPs^aの検討にあった。すなわち、紀元前2世紀中頃のものとして想定されたその詩編写本がマソラ・テキストとは全く異なる配列順を示していたのである。これについて、P. W. Skehan は、この写本が筆写された時代にすでに旧約詩編は成立しており、11QPs^aはクムラン宗団が自身の祭儀用に編集した私家版であると考えた¹²⁾。対して J. Sanders は11QPs^aを、クムラン宗団がエルサレムと決別した時代の旧約詩編の姿と見たのである¹³⁾。彼の見るところでは、旧約詩編の特に関し100編以下の配列はなお未確定の状態で、複数のグループが編纂作業を重ねていた。そうしてわれわれの手元には、エルサレムで行われた編集の成果が残されているのである¹⁴⁾。

その編集者たちは当然、編纂にあたり、配列にまで推敲の労を惜しかなかった。そうして、配列を考察の対象とする旧約詩編研究の視点が導入されてきたのである。そこには、テキストを全体として把握するよう務める、いわゆる共時的・文芸学的方法への認識台頭も大きく作用していたことも忘れるべきではない¹⁵⁾。翻って Zenger と Oorschot の分析に目をやると、彼らが驚くほど配列に対して注意が払われていない。この課題については、以下にわれわれの素描を提示するにとどめ、稿を改めて取り組むこととしたい。

1) 詩編42/43編と44編とは、過去の栄光と現在の悲慘を対照し(42: 5, 10, 44: 2-23)、さらにその現実克服の祈願を共有している(43: 1-4, 44: 24-27)。その対照にあたり、詩人は敵対者による嘲りに言及する(42: 4, 11, 43: 1-2, 44: 14-17)。その敵対者は、詩編42/43編では非イスラエル人であることが暗示されるのみであるが、詩編44編では異邦人であることが明示される(gwjm=44: 12, 15)¹⁶⁾。この点に、詩人の苦悩の深刻化を観察できる。その他、詩編44編では「人の腕ではなく、神の手による」という視点が提示される(44: 4, 7)。

2) 詩編45編では、詩編44編の悲慘の状況とは正反対に、場面を王宮に移す。このテキストでは、真実('mt)と義(sdq)とへりくだり('nw)を愛し、悪(rs')を憎むよう勧められる。11節以下の「娘」に向けられた「忘れよ」という言葉は、王にありがちな傲慢への戒めととれる。そうして結部では、異邦人である「もろもろの民」('mjm)が登場し、新たな異邦人観が導入される¹⁷⁾。彼らは二人称(あなた)で表される者を「讃える」(jdh)。この「讃え」の対象は神である(文脈からは、1.3.で言及したように、神とも、また上記した真実と義とへりくだりとを愛し、悪を憎む者とも解しうる)。ここに「人の腕ではなく、神の手による」信仰がエコーされている。

3) 詩編46編は、破壊的な水(46: 3-4)と神に関係づけられた平安を与える水(46: 5-6)とが対照され、神による救済を印象づける。ここにも同じく「人の腕ではなく、神の手による」という義とへりくだりのメッセージがエコーしている。テキストは、自らの傲慢さを「断念し、神を知れ」(11節)と述べる。11節bで語られる異邦人観は、先行作品である詩編

45編で暗示されたそれを明確化し、コラ詩編の使信の転換点となる。

4) 詩編47編は先行作品の異邦人観をさらに強調し、「すべての民」(kl-h'mjm) への呼びかけに始まる。終結の10節「地の盾は、神のもの」は、46編10節の「地の果てまで、戦いを鎮め」を彷彿とさせ、かつ人の救済が「人の腕ではなく、神の手による」という言葉を想起させる。詩編48編は、シオンの麗しさを「全地の喜び」(3節)に拡げ、やはり新たな異邦人観を継承している。また挿入部と思われる10節「あなた(神)の慈しみを想う」は、自らの願望実現の道具として神を捉える傲慢な神理解の改変を促している。そして11節では詩編45編で用いられた「義」(šdq) が再び語られる。それは「神の手による」ことを含意した。「地の果て」(11節)は詩編46編の鍵語であったが、48編終結部では、さらに「死を越えて」と言い換えられ、詩編49編が導入される。

5) 詩編49編は、ここまで語られてきた新しい異邦人観を取り上げるため、人に等しく訪れる「死」を主題とする。また「神の手による」救済の問題は8, 18節の「人は、決してあがなえない……神が、あがなわれる」で、そして義と傲慢の問題は14-15節で、それぞれ総括されている。

これらのテーマは部分的に、第二ダビデ詩編でも引き続き取り上げられており、筆者は以前の論稿でそれに言及した¹⁸⁾。この点では、旧約詩編第二巻という統一体のテーマとして論ずる必要があろう。詩編テキストの連作性に関する議論は、なお途上にあるが、確実なものはテキストだけである。この方法に基づく分析においては、テキストの表層的な単語レベルの関連性や、シオン神学のような後代の学者が構想した思想の枠からの議論で足りるとするのではなく、テキストに密着した読みから得られる結束性に方向づけられたデーターの提示が、より志されるべきであろう。

注

- 1) 「コラ」については、G. Wanke, Art. "Korach/Korachiten", *TRE* 19, S. 608f. を参照せよ。
- 2) コラ詩編の連作性については、M. D. Goulder, *The Psalms of the Sons of Korah* (JSOTS 20), 1982, がある。Goulderはコラ詩編を、前9-8世紀に北王国ダンの聖所で行われた秋の祭りに関係づける。しかしコラ詩編がその時代に成立していたとは考えがたく(たとえば詩44編は明らかに捕囚が前提となっている)、われわれは彼の研究を受け入れられない。
- 3) E. Zenger, Was wird anders bei kanonischer Psalmenauslegung? in: F. V. Reiterer (Hrsg.), *Ein Gott eine Offenbarung* (FS. N. Fuglister), 1991, S. 397-413.
- 4) E. Zenger, Zur redaktionsgeschichtlichen Bedeutung der Korachpsalmen, in: K. Seybold, E. Zenger (Hrsg.), *Neue Wege der Psalmenforschung*, 1994, S. 175-198. 本論文中では、特に必要のない限り、このZengerの論文からの引用箇所は記さなかった。
- 5) F. -L. Hossfeld-E. Zenger, *Die Psalmen I* (NEB) 1993, S. 271ff.
- 6) A. a. O. S. 294f.
- 7) A. a. O. S. 299ff.
- 8) 注4)の論文、S. 186.
- 9) J. van Oorschot, Der ferne *deus praesens* des Tempels. Die Korachpsalmen und der Wandel israelitischer Tempeltheologie, in: I. Kottsiepen, u.a. (Hrsg.), "Wer ist wie du, HERR, unter den Göttern?" *Studien zur Theologie und Religionsgeschichte* (FS. O. Kaiser), 1994, S. 416

—430。本論文では、特に必要のない限り、この Oorschot の論文からの引用箇所は記さなかった。

- 10) シオン神学については、G. Wanke, *Die Zionstheologie der Korachiten* (BZAW 97), 1966参照。
- 11) N. Fuglister, *Die Verwendung und das Verständnis der Psalmen und des Psalters um die Zeitwende*, in: J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22* (FzB 60), S. 319–384, 1988, S. 380。他に、ders., *Die Verwendung des Psalters zur Zeit Jesu*, BK 47 (1992), S. 201–208; N. Lohfink, *Der Psalter und die christliche Meditation. Die Bedeutung der Endredaktion für das Verständnis des Psalters*, BK 47 (1992), S. 195–200。
邦語では、拙論「旧約詩篇の編纂と配列に関する一考察」『オリエント』35/2 (1993), 22–38頁、N. ローフィンク「詩編理解にとっての最終編集の意義」WAFS 刊行会編『主のすべてにより人は生きる』1992所収、石川立「詩編の様式と編集」、木幡、青野編『聖書学の方法と諸問題 (現代聖書講座 第2巻)』日本基督教団出版局、1996年所収。
- 12) J. Sanders, *Cave 11 Surprises and the Question of Canon*, in: D. N. Freedman (ed.), *New Directions in Biblical Archaeology*, 1969, pp. 101–115.
- 13) P. W. Skehan, *Qumran Manuscripts and Textual Criticism*, VTS 4 (1957), pp. 148–160;
——, *The Scrolls and the Old Testament Text*, in: Freedman (ed.), a.a.O., pp. 89–100;
——, *Qumran and Old Testament Criticism*, in: *Qumrân: sa piété, sa théologie et son milieu* (BETL 46), 1978, pp. 163–182.
- 14) この議論については、注11)『オリエント』35/2の拙論、特に26頁以下を参照。
- 15) この方法については、拙論「文芸学的方法——理念と応用」、木幡、青野編『聖書学の方法と諸問題 (現代聖書講座 第2巻)』日本基督教団出版局、1996年所収を参照。
- 16) 旧約詩編における敵対者の問題は、拙論「旧約詩篇における敵対者と編集層」『日本の神学』33 (1994) を参照。
- 17) このような同一作品内における「もろもろの民」(‘mjm) のニュアンスの変化は詩編96編にも確認できる。拙論「『もろもろの民をさばく』(詩96:10, 13)と旧約詩篇第4巻」『神戸女学院大学論集』42/3 (1996年) 参照。
- 18) 拙論「詩篇55篇の文芸学的・社会史的考察」『基督教研究』53/1 (1991) 参照。

(原稿受理1999年10月1日)